

片岡良一著作集

第十卷

中央公論社

片岡良一著作集 第十卷

定価二六〇〇円

昭和五十五年三月十五日印刷
昭和五十五年三月二十五日発行

著者 片岡良一

発行者 高梨茂

印刷者 山田博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一八一七
電話（五六一）五九二一一九

振替東京二二三四
©一九八〇 検印廃止

片岡良一著作集 第十卷 近代文学入門

目次

近代文学の読み方

独歩の少年ものによって

「即興詩人」と「人間万歳」

「清兵衛と瓢箪」と「荒絹」

「煎餅売」と「空中の芸当」

「トロツコ」と「鼻」

「葉亭四迷の「ボチ」その他

「夏の靴」と「故郷」

「吾輩は猫である」と「山椒大夫」

有島武郎の「御柱」など

近代日本の小説

近代日本文学の展開

二葉亭四迷「浮雲」

国木田独步「河霧」と「酒中日記」

島崎藤村「破戒」

夏目漱石「それから」

森鷗外「青年」

永井荷風「新婦朝者日記」

武者小路実篤「お目出たき人」と「友情」

志賀直哉「暗夜行路」

芥川龍之介「河童」

横光利一「紋章」

近代日本文学史の頂角

補論

一七

一四

一五

一三

一七

一八

一九

二〇

二二

三〇

三〇

三六

- 一 明治二十年以前の人々 二五
- 二 饗庭篁村・斎藤緑雨・北村透谷・宮崎湖処子・
正岡子規・江見水蔭・山田美妙 二六
- 三 樋口一葉後期の作品 二八〇
- 四 田山花袋・徳田秋声・国木田独歩・三島霜川 二九四
- 五 田山花袋・岩野泡鳴 三〇七
- 六 田村俊子の作品とその生涯 三六
- 七 広津和郎・葛西善蔵・宇野浩二 三九
- 八 加能作次郎・水野仙子・素木しづ子・吉田絃二
郎・谷崎精二・相馬泰三・加藤武雄・佐佐木茂
索・尾崎士郎・岡田三郎・藤森成吉 三四
- 九 「二房の葡萄」 三五

近代文学の読み方

独歩の少年ものによって

「即興詩人」と「人間万歳」

「清兵衛と瓢箪」と「荒絹」

「煎餅売」と「空中の芸当」

「トロツコ」と「鼻」

「二葉亭四迷の「ボチ」その他

「夏の靴」と「故郷」

「吾輩は猫である」と「山椒大夫」

有島武郎の「御柱」など

独歩の少年ものによって

文学とはどんなものか

国木田独歩には子供を書いた作品——少年ものが、かなりたくさんあるのですが、ここにはその中から「鹿狩」(明治三十一年)、「春の鳥」(三十七年)、「泣き笑ひ」(四十年)の三つをとりあげてみます。

まず「鹿狩」は、その表題がしめしているとおり、主人公の徳さんという少年が、鹿狩につれて行ってもらった時のことを、主として書いたものです。かれは「中根の叔父」という人に、鹿狩につれて行ってもらったのですが、その日、中根のうちにやってみると、そこに集まった人々の中に、「今井の叔父さん」という人がいました。同勢十一人の中で「一番年を取つてゐる」くせに、「皆なの中でも一番声が大きい、一番元氣がある、一番面白さうである、一番肥満つてゐる。」主人公はその叔

父さんが氣にいつて、そのあとにばかりくつついて歩きました。ところが、いよいよ狩場について、めいめいがそれぞれの持場持場にわかれてみると、今井の叔父さんと主人公のいるところには、いっこう鹿があらわれません。そのうちに叔父さんはお酒をのんでねてしまいました。すると、ふいに大きな鹿があらわれたのです。「僕はどう為ようかと思つた。叔父さんを起さうとしたが止めた。起すと叔父さんが必定『何だ何だ』と大きな声を出す、鹿が逃げてしまふ、僕は思はず、叔父さんが小松に立掛けて置いた銃をソツと把つた。」そうしてみごとにその鹿を射とめました。それがその日獲った六頭のうち一番大きな鹿でした。皆大獵をよろこんで帰ることにしましたが、その途中で、いっしょに行つたおじさんのひとり、が、「溪流たにがはの岩の上に止まつてゐた小さな真黒な鳥」——岩鳥をうって、これを今井の叔父さんに渡ししました。叔父さんが思いがけず真面目な顔をして、お礼をいいながらそれを受け取つたので、主人公はちょっとふしぎな感じに打たれました。ところが、それは、そのとき叔父さんの子供が氣がちがつていて、岩鳥はそのきちがいをおす葉であつたので、それで叔父さんがまじめ

な顔をしたのだということが、あとになってわかりました。その子供が死んでしまってから後、主人公は今井の叔父さんの養子になりました。「僕は其後幾度もお伴をして獵に行つたが、岩鳥を見つけるとソツと石を拾つて追つて呉れた。義父が見ると機嫌を悪くするから。」

——というのがこの話の結びです。

次の「春の鳥」は、六蔵という白痴の少年のことを書いたものです。かれは、もう十一か十二ぐらいになつていながら、十までの勘定さえ満足にできないような白痴なのですが、そういう白痴の少年が、三月末のある日、むかし城があつたので城山とよばれている山の、高い石がきの上から落ちて死んでしまったのです。その死に深く感動させられた作者は、次のように書いています。

余り空想だと笑はれるかも知れませんが、白状しますと、六蔵は鳥のやうに空を翔け廻る積りで石垣の角から身を躍らしたものと、私には思はれるのです。木の枝に来て六蔵の眼のまへまで枝から枝へと自在に飛んで見せたら、六蔵は必定、自分も其枝に飛びつかうとしたに相違ありません。(中略)

英国の有名な詩人の詩に「童なりけり」といふがあ

ります。それは一人の兒童が夕毎に淋しい湖水の畔に立て、両手の指を組み合はして、梟の啼くまねをする、と、湖水の向の山の梟がこれに返事をする、これを其童は樂にして居ましたが遂に死にまして、静かな墓に葬られ、其霊は自然の懷に返つたといふ意を詠じたものであります。

私はこの詩が嗜きで常に読んで居ましたが、六蔵の死を見て、其生涯を思ふて、其白痴を思ふ時は、この詩よりも六蔵のことは更に意味あるやうに私は感じました。

石垣に立つて見て居ると、春の鳥は自在に飛んで居ます。其一は六蔵ではありますまいか。よし六蔵でないにせよ、六蔵は其鳥とどれだけ異つて居ましたらう。この感動が、作者にこの作を書かせたおもな動機であつたことは、いうまでもないでしょう。

最後の「泣き笑ひ」は、魚をつりに出かけた少年時之助がなかなか帰らないので、おかあさんがたいへん心配している、心配のあまりに女中をしかりつけたり、おとうさんが心配などする必要のない事情を色々話すのにも、かえって反抗的なことば返しをしたりしているところに、

時之助はのんきな顔をして帰って来た、にもかかわらず、おとうさんはいっこうのごともいってくれないので、おかあさんがしかりつけたが、あべこべにすっかりあげ足をとられてしまった、ということを書いたものです。

「何になります。そんなものを十尾や五尾釣つて来て、真実に人に心配ばかりかけて！」

と先程から父親が優しく言ふ程、劫腹がつて居た母親は我鳴りつける。

「ほッだ。」と時之助は嬉しさうに鰯を眺めながらいふ。

「何が『ほッ』です。」と母親は睨みつける。

「だって母上の国ぢァこれが五尾か十尾でも、日本帝国では四十九匹ですからね。」

「百尾でも五尾でも其様ものは同じことです、生意氣を言ふ。」

「でも此奴のやうな大きい鰯は母上見たことが無いでせう。」と鰯の尾を掴んでぶらさけて見せる。

「何が大きいものか。鼻へ捻り込めさうなものが何になります。」

「ほッだ。」

「何が『ほッ』です。」

「ほッだ。」

「何が『ほッ』です。」

「だって母上の鼻の穴は随分大きい穴ですなえ。」

「何故です。」

「だって此鰯が鼻へ捻り込まれるのですもの。」

と平氣でいふのを聞いて、父親は思はずくずくと笑つた。

「まァ此兎は、此兎は、」と母親は口惜しいので泣くのか、可笑しいので笑ふのか、眼には涙、口元は笑味、呆れ返つて後の言葉が出ない。

これがその終りの一節です。「泣き笑ひ」という表題は、むしろこの一節からつけられたものでした。

以上三つの作品をしらべてみながら、文学というものがどんなものであるのかを、ごく大まかにでも考えておきたいと思います。

まず、「鹿狩」に出てくる「今井の叔父さん」の、せっかく狩にきながら寝てしまつたり、目がさめていればひどくはしゃいで見せたりするのが、ちょっと見にはば

かばかり、こっけいに感じられるけれど、じっさいはこっけいどころではない、深い心痛をみずからまぎらわそうとしているためのものであった、という書き方に、注意してください。こういう書き方は、外国——ことにロシア文学の影響によって近代日本文学のものになったのでした。ですから、「鹿狩」がそういう書き方を取り入れて、装われたにぎやかさなどというものをとらえていることが、地名などでも「さの字浦」だの「つの字崎」だのというように、新しいくふうをこめたよび方であらわしているというような、ほかの部分の書き方と合わせて、この作を、それが書かれた明治三十一年ころとすれば、ひどく新鮮な、ハイカラな感じのするものにしたのです。主として明治三十年代に活動したのであった独歩の、近代作家らしい新しさの一面がそんなところに見いだされるのです。

が、ここでは、そんなことより、そういう見方のうちにこそ文学——あるいは小説家の目があるのだということとを、まず注意しておきたいと思えます。そういう目の奥には、ものごとをただありのままに見るというのではなく、どうしてそうなったか、なぜなのだろうと、その由

来をとおして根本から理解しようとする態度があるわけです。そうして、ものごとを原因・結果の関係をとおして正しく見（理解し）ようとするのですから、その方法はおしつめて行けば科学的なものにならねばならぬことになりますし、たんに一つの事がらを表面からながめただけで、かんたんに裁いてしまわないのですから、これを愛といってもいいのです。「どうもあの叔父さん変てこだよ」と感ずるばかりでこれを冷笑したりするのにたいして、こうしてその理由までつきつめて行けば、この作の主人公でなくても、たれでも叔父さんのこっけいなようすの中に気の毒なものを感ずることになるのですから、これを愛といってもいいわけでしょう。

もっとも、そういうばあいには、いつでも気の毒がらせるような結論が出てくるとはかぎりません。理由がわかってかえって腹の立つようなばあいだってあるでしょう。要するに、憎むにせよあわれむにせよ、たんに表面にあらわれたところだけで判断するのでなく、その根本的な由来をまできわめてから判断することになるのですが、文学というものは、つまりはそういう根本的なところから人間や人生を理解させるためのものになる——少なくとも

ともそれを一つの重要なたらき（機能）とするものなのです。

と同時に、そうしてものごとを、たんにありのままに写す（模写する）だけでなく、その奥にある根本的なものにまで触れようとするとともに、正しい写実主義が成り立ちます。ですから、文学は人間や人生を理解させるものだ、というはたらきをみとめてこれを重視するかぎり、しっかりした写実主義というものが、また重視されねばならぬことになるわけです。独歩は、かならずしもそういう写実主義の方法に、十分深く徹底した人ではありませんけれど、とにかく日本の近代作家としては、もっとも早くそういう方法を身につけた人であったことが、まずこの「鹿狩」を読むだけでも知られるのです。

それから次の「春の鳥」では主人公六蔵の死を悲しむより、作者がそこに何か「意味」を感じて、むしろ樂しげに、興奮しているのが、少しわかりにくいことかも知れないと思います。

これは、根本的には独歩が「自然」を愛し尊んだ人であったところからきたものです。かれは、天地山川という意味での自然をも愛して、「武蔵野」そのほかのすぐ

れた自然文学——自然を写した作品——をものこしていますが、そうして自然を愛する気持は、一方では当然人情の自然さとか、まこととか率直さとか正直さとか、無邪気さとか純真さとかいうものを尊ぶ気持につらなりますし、そこからさらに、悪がしい知識など持たないものとして子供とか幼児とかいうものを尊ぶ気持が生れるのです。当否は別ですが、もっとも無邪気で純真なものは幼児だという考え方は、だれにもいちおうは理解できるものでしょう。はじめにも書きましたように、独歩に少年や幼児を描いた作品が多かったというのも、一つにはかれがそういう思想をいだいていたからであったのです。「初孫」という作品では、かれは赤ん坊のひとりいることが、家せんたいを明るくしあわせなものにすることを書いています。かれはそれほど子供というものをい

いものだと考えていたのです。そうして、そういう考え方にいちずに徹底して行くと、そばくで無知なものを尊ぶことになり、したがって白痴などというものを、尊んだり愛したりせずにはいられぬようなことにもなりやすいのです。処女作の「源おぢ」という作品に、「紀州」という白痴の少年乞食を愛

する不幸な船頭のことを書いたところから、独歩はそういう思想にも傾いていたのでしたが、それがこの「春の鳥」で結晶したのです。それはかれの思想としても、一つの当然な発展であったと同時に、「白痴の子」という詩の中で、「白痴は永遠の天使だ」とうたったイギリスの詩人ワーズワースの影響でもありました。「春の鳥」の中に「童なりけり」という詩を作った「英国の有名な詩人」とあるのも、このワーズワースのことです。そういう詩人からいろいろの影響を受けていたくらいに独歩ですから、白痴六蔵の鳥のように飛んでみようと思っただけで死んでしまったという、無邪気といえども無邪気なものである死に方にも、何かしら神の道に通ずるような高い意味を感じようとしているのです。素直に信ずるそぼくさや、自然そのものに同化したような趣を尊びよろこんでいるのだといってもいいでしょう。

しかし独歩は、一方にはそういう感じ方に傾こうとする気持を持ちながら、他の一方にはかなり常識的なところもあった人でしたため、そういう感じ方にいちずにはなりきれなかったのです。そのことは、前に引用した文章のはじめに、「余り空想だと笑はれるかも知れませ

んが」などと書いているのを見ても、すぐに理解されましよう。「白痴は尊い」とか「白痴は神だ」とかいう感じ方が、常識とは食いちがった、その意味ですでにわかりにくいものであるうえ、そういうところからきた思想としての熟し足らなさがあるため、その部分が、よけいわかりにくいものになっているのだと思います。

そういう意味では、「春の鳥」は十分熟した作品とはいえないのですが、文学というものは、先人のすでに示したもののくりかえしであってはならぬ、いつでも新しいものであることを必要とされているものです。そしてその新しさは、思想の深さ（徹底性）にも特異さにも、題材の深刻さやめずらしさにも、ありうるわけです。作品のできばえとしてはやや不十分なところがあっても、そういう徹底性や特異さをふくんでいるため、「春の鳥」は独歩の少年ものの中でも特に注意されるものの一つになっているのです。そういう特異さとか徹底性とかいうものを尊ぶところにも、文学の広く深く人生を知らせようとするものだという機能（はたらき）あるいは特質が、感じられていいわけです。あなたの方にとって、白痴を尊ぶ人もあるのだとか、そういう思想の生れやすい理由も